高校生活をたのしもう！？なにそれ？

鳳統雛里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高校生活をたのしもう！？なにそれ？

【Ｎコード】
Ｎ０２９８Ｈ

【作者名】
鳳統雛里

【あらすじ】
親友の３人の女子には逆らえない不幸な男子しかしそんな不幸な状況のなかいきなり転校生が！？この転校生の存在で結城の学園生活は大変なことになるのか？はたまたこの生活からだ出できるのか？

第一話：日常（前書き）

はじめまして！
うまく書けたかどうかわかりませんが見ていってください

第一話：日常

場所：屋上
時間：昼休みぐらい

「やっぱさぁ～、ここの先生たちってさ、やる気とかないんだよな」

「今日ガッコ終わったらゲーセンいかね？」

周りのそんな会話を聞きながらパンを食べながら空を見ている人。

≪今日の午後の授業は暇だな・・・≫
賀川結城（かがわゆうき）
名前は普通だが地味な男。
自分から人前に立つことがあまり好きではないから、あまり知られていない。
人気者になるチャンスはあるものの興味がないのでまったくチャンスを生かしてない男。
こいつの人生の半分は無駄になっていると断言しよう。

「結城、なぁんでこんなところにいるのかなぁ？」
背筋に嫌な視線を感じた結城はゆっくりと後ろを振り返った。
「よ、よう。」
そこには結城の親友が2人いた。
長身で髪の長い方が「安藤真理奈（あんどうまりな）」
メガネでいかにも無口そうな奴が「木村璃音（きむらりね）」
2人とも結城とは小学校のころからの親友。
幼馴染的なポジションだ。
「なんで結城は私達を待たずに先に屋上に来てるのかな？」

「そ、それは・・・」
「私、昼ご飯一緒に食べようって言ったよね？」
「はい。確かに」
「・・・・・・ゆう、忘れてた？」
「・・・正直なところ忘れてました」
「じゃあ、私達との約束を忘れてた結城にお仕置きタ～～イム」
「ちょ、それは勘弁して」
「じゃあなにがいいの？」
真理奈は笑いながら言った。
≪え？何その笑顔、怖いんだが・・・≫
結城はとりあえず、
「逃げるって選択肢で」
「却下」
真理奈の言葉と同時にみぞおちにパンチをくらった。
「グハッ」
「・・・・・・私も」
そう言って璃音も地面に倒れかかっている結城の背中に蹴りを入れた。
「ちょぉぉ！？せ、背中はやばいって」
「うるさぁい！これだけで済んだんだから別にいいでしょ」
≪・・・お前らどんだけやるつもりなんだよ≫
「とりあえず教室までもどるよ」
「りょ、了解・・・」
結城はこれ以上の罰を免れるために真理奈の言うとおりにした。

場所：教室
時間：昼休み

結城は真理奈たちと教室に戻った。
「真理奈、遅かったね」

「ごめんごめん、この馬鹿探すのに時間かかっちゃってさ」
「ったく何やってるんだよ、馬鹿結城」
話しかけてきたのは真理奈と璃音の親友「吉名舞由（よしなまゆ）」
こいつとは高校に入ってから会ったんだが真理奈達と親友だとわかったらすぐに
「じゃあ、私の部下だ。よろしく」
とかなんとか意味のわからん事を言ってきた奴だ。
「で、どうして馬鹿結城は教室じゃなくて他の場所にいたの？」
「ゆう・・・忘れてた・・」
「はぁ～～なにやってんだか」
「それに関しては本当にすまん！」
「まぁ、別にいいけど。結城がどうなろうが私の知ったことじゃないし」
「ほんとごめんってば舞由。そんなに怒るなよ」
「何いってんの？怒ってなんかない、勘違いしないでよね」
≪いや・・・どう考えてもその態度は怒っているようにしか見えないぞ≫
「なんか私のど乾いたな～。結城ジュース買ってきて、ミルクで」
「・・・はい？」
「じゃあ私の分も！コーラで」
「・・・・・・ココア」
「え～～っと皆さん何を・・・」
「さっさと買ってきなさいよね。それとも殴られたい？」
「・・・買ってきます」
結城は教室から出て行った。

場所：廊下
時間：めんどくさいから飛ばす

「ったく、あいつら飲み物ぐらい自分で買いに行けっての」

「よう結城、また真理奈達の使いっぱしりか？」
「うっせだまってろ」
こいつは「中森晃（なかもりあきら）」
いたって普通の奴だが不良だ。
あれ？不良なら普通じゃなくね？？

「なんだよつれないな～～」
「急いでんだから邪魔すんな」
「真理奈達、怒るとこわいからね」
「わかってんなら話し掛けんじゃねぇよ」
「まぁ結城、なんだかんだでモテモテだねぇ。あんなかわいい子達と一緒・・・」
「黙れカス」

「やべ、急がねぇと舞由たちに殺される」
結城は晃を戦闘不能にしてからその場を去った。

場所：家の前
時間：夕方

「はぁ・・・やっと解放されたよ」
結城は玄関の扉を開けた。
「兄貴、おかえり」
「ただいま」
「またぱしりにされたの？だらしないねぇ兄貴は」
こいつは妹の里奈（りな）
性格、性別ともに結城と反対な奴。
「しゃあねーだろ。今日のは俺が悪かったんだし・・・」
「兄貴毎回それ言ってないか？」
「・・・・・そういうお前はどうなんだ？」

「いつもどうりに決まってんだろ！今日も舎弟増やしてやったぜ」
≪何やってんだよおまえは≫
「・・・まぁそれは冗談、でも午前中だけで帰ってきちゃったし」
「は？なぜだ」
「だって授業たるいんだもん」
≪それだけで学校休むなよ≫
とりあえず結城は言葉にはせずに突っ込んだ。

第二話：妹からの助言??（前書き）

小説タイトルについてはスルーで（笑
勢いで決めてしまったのでほとんど意味はないです。
いやいや意味も考えて作ろうよ　ｂｙ結城

第二話：妹からの助言??

家に帰って来てから結城は夕食を作っていた。
結城の両親は仕事で海外に行っていて年に1、2回ぐらいしか帰ってこないため実際家には結城と妹の里奈しかいない。
「兄貴〜〜夕飯まだ〜？」
「ちょっと待ってろ、もうすぐ出来るから」
結城は料理を皿に盛ってリビングへ持って行った。
「「いただきま〜す」」
里奈が野菜炒めに手をだす。
「兄貴さぁ〜〜なんで真理奈さん達にパシられてんの？ビシって言えばいいじゃん」
「…それが言えれば苦労はしないさ」
結城はコロッケをつつきながら言った。
「なんで？私ならすぐに言って、私に従わせるように言ってやるんだけどな」
「それはそれで駄目だろう」
≪ってか、こいつなんでこんな性格になったんだ？確か高校に入る前は普通だったが……≫
「まぁぶっちゃけると俺がそんなこと言ってもあいつらのことだ、普通にスルーしていつも道理になるに決まってるだろ？もしくは『そんなこと言う結城にはお仕置きしないとね』とかでまたボコされるぜ？」
「女子よりも男子の方が強いじゃん、普通に考えて。ってか兄貴運動できるんだからボコられそうになっても逃げ切れるっしょ？」
「あいつらをそこらの女子と比べない方がいいぞ、我が妹よ」
「なんだよいきなり？気持ち悪いな」
「いいか？真理奈は俺よりも運動ができるんだぞ？部活に入っていないからそんな感じはしないが俺よりも早いんだぞ？だから逃げて

も無駄なんだよ」
「へ～～」
「それに舞由なんて捕まったら最後、こっちの言い訳も聞かずにめった打ちにしてくるぞ。俺の親友が冗談半分で舞由のことをからかったらどうなったか、思い出すだけで寒気がしてくるぜ…」
「なるほどね」
「璃音はまだ良い方だがあいつも運動はできる方だからな。俺よりは下だが真理奈と2人で追い掛けられたら絶対に逃げ切れないからな」
「……つまり兄貴は男勝りの女子3人一緒にいて自分よりも格が上だから逆らえないということ？」
「まぁ簡潔に言えばそうなる」
「真理奈さん達キレイで可愛いのにな……」
「真理奈たちがか？ないない！それはないな」
「……兄貴も鈍感だな」
「ん？なんか言ったか？」
「なにも～」
「そうか」
そこでいったん会話が途切れた。
2人ともただ夕飯を食べ進めているだけ。
「ってか兄貴、ほんとに料理得意だな」
「なんだよ急に…」
「ただ思っただけだよ、普通に上手いなって」
「……ほめても何もでねぇぞ」
「んな意味じゃねぇって、何でそんなにできるのかなって聞きたいんだよ」
「まぁ父さんたちは帰ってこないし、かといって毎回コンビニとかだと金が結構無駄になるだろ？だから料理ができるようにしたんだよ」
「そうなんだ。まぁ私が料理しないでいいから今のままでいいんだ

けどね～～」
「おいおい、普通だったら女が料理するもんじゃないのか？」
「今の時代別に女が料理できなくたって普通だよ。兄貴もそういう常識持ってるとこが古いんだよな」
「いやいや、おれはいつも最先端の流行に合わせているつもりだぞ？」
「そういうことじゃねぇって」
「じゃあ、どういうことなんだ？」
「兄貴に行っても無駄だから、教えない～～」
「はぁ？なんだよそれ？」
「ごちそうさま～。じゃあ私部屋に戻るから」
「ちょ、待てって」
里奈はそのまま自分の部屋に戻っていった。

「ったく、あいつ何が言いたかったんだ？」
自分がなにか間違ったことを言っていたのかわからない模様。

結城は食べ終わった皿の片付けをしながら
≪まぁ確かにあいつの言う通りビシって言ってやりたいけどなぁ……≫
無理なことと解りつつも結城はそんなことを思っていた。
≪どうせ真理奈たちのことだ、俺のことなんてどうも思ってないだろ。≫
「俺だってこんな生活から抜け出したいよ……」
そんなことを思う結城であったが到底無理な話だ。
まだ知り合って間もない時であればこの状況を打破??することはできたであろう。
しかし真理奈と璃音は知り合ってから1年たっている。
1年生の時に知り合ったころはこんな状況ではなかった。
今のような生活になったのは、1年の中間ぐらいのときからだ。

≪でも、何でこんなことになったかの原因が思い出せないんだよな……≫
なぜかその部分だけが思い出せなかった。
今の生活となった重要な部分が思い出せない。
他の事なら思い出せるのに、そこだけがいつも空白になる。
≪なにか重要な……なにか大切なことを忘れてる気がする≫
結城はそのまま考え込んだ。

「……寝よう」
結局何かは、思い出せないままだ。
≪まぁ、いいよな？今更なことだ。考えてもだめならしかたない≫
結城は自分の部屋に戻っていった。

一方某学校前

学校の校門の前に一つの人影があった。
「やっと見つけた……ここにあいつがいる」
その人影に近づいてくる人物がいる。
「……様、そろそろ時間です」
「わかってるわ。戻りましょう」
「しかしなぜこのようなところに編入しようとお考えで？」
「う～～ん、神のお告げってやつなのかな？？」
「はぁ…」
「ここにこればあいつに会えるって気がしてね」
「失礼ですが、あいつとはだれのことですか？」
「あら、あなたに言ってなかったかしら？」
「いえ、そのようなことは」

「まぁいいわ、そのうちわかることだから」
「そうですか」
「立ち話もこの辺にしましょう。もう帰らないといけない時刻だし」
「そうですね。戻りましょう」
二人はその場を後にした。
「結城、また近いうちに会いましょう」
その言葉を残して、２人はどこかに消えてしまった。

第二話：妹からの助言？？（後書き）

感想などなどまってるよ～　ｂｙ結城

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0298h/

高校生活をたのしもう！？なにそれ？

2010年10月15日01時25分発行